

## <時間の考古学>

まほろん館長 石川 日出志

**【導入】** 考古学で具体的な話になると、必ず「〇〇式土器」とか「編年」という語が登場します。これは何を意味し、なぜこんな語をもちいるのでしょうか？ 本日はそのことを取り上げます。

〇〇式とか編年とかの語は、年代・時間を表します。では考古学では、そうした時間の尺度をどのように定めているのでしょうか。実例を挙げて紹介しましょう。

今回は、ちょっと大学の授業「考古学概論」のような内容になりますが、細かな点は気にせず、大枠のところをつかみ取って頂ければ幸いです。

### 0. 時間の流れの感じ方・捉え方

(1) 時間の感じ方： 加齢に伴って感じ方が変わる / 私の場合を例に

- ・30代半ば、記憶の中で最も若い母の年齢に近づいた時、一生という時間の短さに気づく。
- ・私が8歳で亡くなった曾祖父は明治12年(1879)生まれ=今から145年前。
- ・誰しも50歳をすぎると、約100年という時間が感覚的に分かるようになる。

(2) 時間の捉え方： 人の活動を時間の経過の中で捉えるには

- ・二つの「時間」(E. プリチャード 1940)

┌ A：生態的時間=一年周期で繰り返される環境にかかわる時間  
└ B：構造的時間=社会集団相互の関係の変動にかかる時間

- ・1年/四季/十干十二支 (十干=甲乙丙丁戊己庚辛壬/十二支=子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥)
- ・暦と時計の普及      ・寿命の推移も影響しよう

➡ 考古学では時間(B)をどのように扱っているのだろうか？

〔例〕縄文土器型式編年【2】と、日本で最初の編年表【3】

★チャレンジしてみよう！：本宮市上原(かんばら)遺跡の出土土器【1】を型式判定する

### 1. モノから年代を導く

(1) 編年=考古学が歴史学の一員となる必要条件

- ・土中から掘り出されたモノは、そのままではものでしかない  
→そのモノはいつ when, どこ where で, 誰 who がつくり・使ったのか, を定める必要。
- ・型式学=モノを分類(同じものと違うものを分別)して, 作られた単位(型式)を求める。
- ・型式には「時間」・「空間」・「技術・社会」の3種の情報が伴う。
- ・このうち「いつ」に注目するのが編年(型式の編年序列) ⇒どのようにして定めるのか？

(2) 一括遺物

- ・一括遺物=遺跡内に同時に残された(置かれた/埋もれた)と認め得る遺物群。
- ・これら遺物群はそこに残された時点では同時だが, 古い/新しいものが混じる可能性。
- ・多数の一括遺物を比較すると, 古いものははじくことが可能。
- ・一括遺物の判断は十分な留意が必要。

〔例〕山梨県重郎原遺跡と東京都貫井南遺跡 【4】

⇒ 「一括遺物」という判断には十分な留意が必要。重郎原例は、住居の床面に多数の土器群が一括して置かれたと判断できる。一方、貫井南例は、住居跡埋没後の窪地に破損した土器の破片群が数度にわたって投棄されたと思われる。

### (3) 層位

- ・地層累重の法則＝（後世の乱れがない）複数の地層の形成は「下が古く上が新しい」。
- ・層位＝一括遺物（に準じる遺物群）を含む複数の層位の遺物群は「下が古く上が新しい」。

〔例〕横須賀市夏島貝塚 【5】

⇒ 第1貝層から一定の特徴をもつ土器が多数出土＝夏島Ⅱ式土器。その下（褐色土層）から異なる特徴の土器が出土＝Ⅰ式。第一混土貝層とその上の第二貝層からⅡ式の他に、それぞれ異なる特徴の土器群が出土＝Ⅲ式・Ⅳ式土器。

### (4) 比較

- ・一括遺物どうしや、層位ごとの遺物群を比較（同じ／違いを識別する）する。
- ・比較するには、何（どこ）をどのように比較するかの基準が必要。  
器形・文様帯・文様構図・描き方など。

### (5) モンテリウス (O. Montelius) の型式学

- ・北欧の青銅器時代の墳墓出土品（一括遺物）から組み上げた分類と序列による編年。
- ・「型式組列（それつ）」を設け、一括遺物と層位で検証し、矛盾がなければ事実とみなす。
- ・モンテリウスの実際 【6・7】

まず、銅斧・銅剣・留め針等の型式組列を仮設する。

次に、墳墓副葬品の一括遺物で各器物の型式組列（器物どうしも）を検証する。

矛盾がなければ各型式組列の意味を読み、各種青銅器の組合せの編年をつくる。

\* 日本では京都大学から普及して行き、標準となる。

0. モンテリウス（濱田耕作訳）1932『型式学研究法』岡書院（1984 雄山閣復刻）が版を重ねる。

### (6) 山内清男の「型式」学

- ・「任意の物件を並列し、独断によって古かるべきを決め、それに照らして新しきものを推定する様な所謂型式学は取るに足らず」という一文（山内 1937）の真意は？

⇒ 石川の理解： モンテリウスの型式学は、青銅斧では石斧に近いもの、留針は実用的で簡素なものを最初に置き、そこから他の順番を定める。そうした方法は、青銅器時代ではできても、石器時代はそもそも何が古いか分からないから通用しない。このような所謂型式学の安易な流用は混乱を招く。山内は「一括遺物→層位→比較」で標準を定める【3下】。

### (7) 土器がある時代は土器型式がもっとも信頼でき、適用範囲が広い

- ・土器は可塑性に富むため、造形の変化が大きい。
- ・土器は壊れやすいので、多数生産され、その結果特徴が早く変化していく傾向。
- ・多数残されるので、どこでも発見されるので、遺構などの年代を知るのに適している

## 2. 型式に年代数値を与える

### (1) 考古学における二つの年代

- ┌ 相対年代： 型式に基づく相対的な前後（古新）関係。考古学における年代基準。
- └ 絶対（値）年代： 数値で示された年代＝数値年代。型式序列に年代数値を与えるもの。

すでに暦年代がわかる資料をもとに型式序列に年代数値を与える考古学的方法と、理化学的な分析によって年代数値を割り出す方法とがある。

\*「絶対年代が正しい」と誤解してはいけない！ 数値年代は、個別のサンプルの年代でしかない。型式に年代数値を付与することで利活用が可能となる。

## (2) 暦年代が分かる資料を用いる事例

### ①. 弥生時代の事例： 【8・9】

- ・「漢委奴國王」金印： AD57年の製品だが、江戸時代に単独で見つかったために、考古学では年代基準には使えなかった。
- ・北部九州で甕棺の型式に伴う漢鏡の型式どうしを照合して、北部九州の弥生時代中／後期に暦年代(=BC/AD以後)を与えることが可能となった。

### ②. 古墳時代の事例： 【10】

- ・さきたま古墳群稲荷山古墳： 金錯「辛亥年」(AD471) 銘鉄剣が副葬された古墳から出土した須恵器がTK47型式。

### ③. 古代の事例： 【11上】

- ・長野県更埴条里遺跡の土器型式と紀年銘木簡

## (2) 理化学的数値年代： 本日は深入りしない

### ①. 放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代法

- ・炭素Cの同位体 ( $^{12}\text{C} : ^{13}\text{C} : ^{14}\text{C}$ ) のうち 5730年で半減する  $^{14}\text{C}$  を測定して、年代換算を行う方法。

### ②. 年輪年代法・酸素同位体比法

- ・1年ごとに形成される年輪の幅が、年ごとの生育環境の変動に応じて揺れることを数値化し、そのパターンを年代基準とするもの。樹種ごとに標準化。
- ・最近では、各年輪の酸素同位体比の変動を標準化して、出土資料の年代測定に用いる。樹種を横断して適用できる。近年は年代測定とともに、気候変動の具体化が注目される。

## 3. 旧石器時代研究の「時間」： つねに極端な時間の長／短を視野に入れて人類史を語る

### (1) 編年=数千年単位で考えざるを得ない 【12】

- ・約3万年弱を、石器の特徴の変化から追跡するので、数千年単位で考える。
- ・洞窟遺跡内の各層は細かく数値年代が与えられるが、石器群の群別は難しい。【11下】

### (2) 石器づくり=瞬間ないし1時間程度が見える 【13】

- ・短時間で連続して石器をつくり、移動する誘導生活。

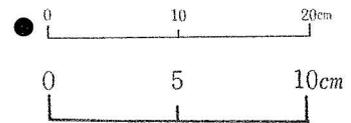
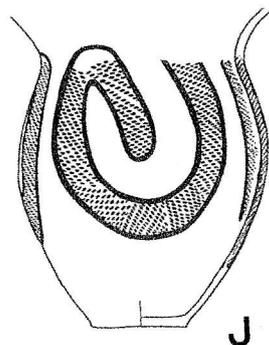
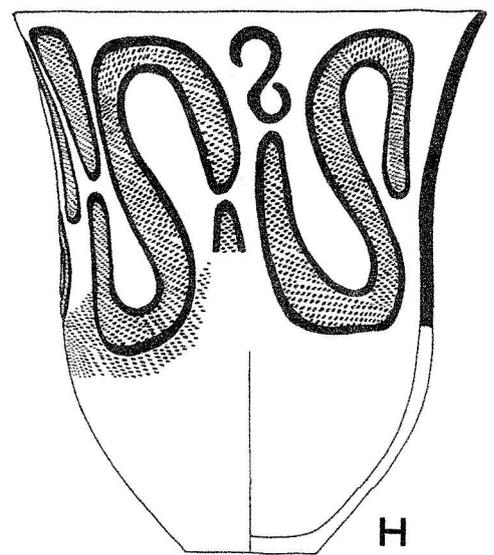
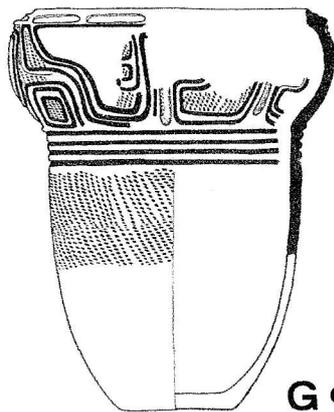
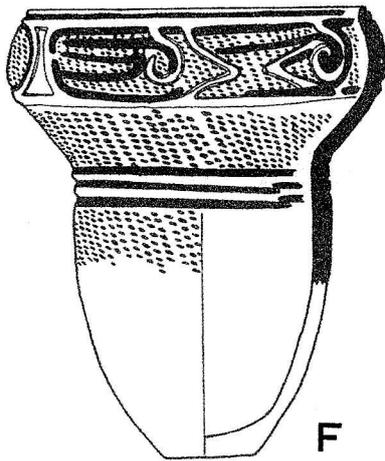
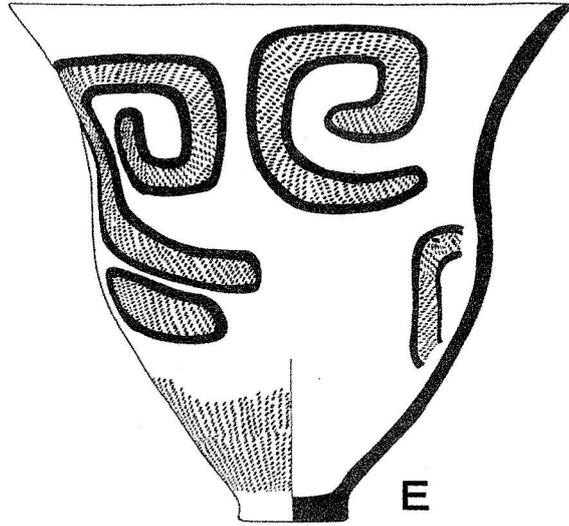
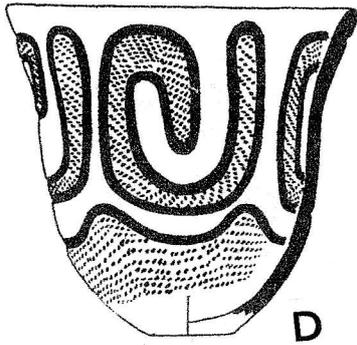
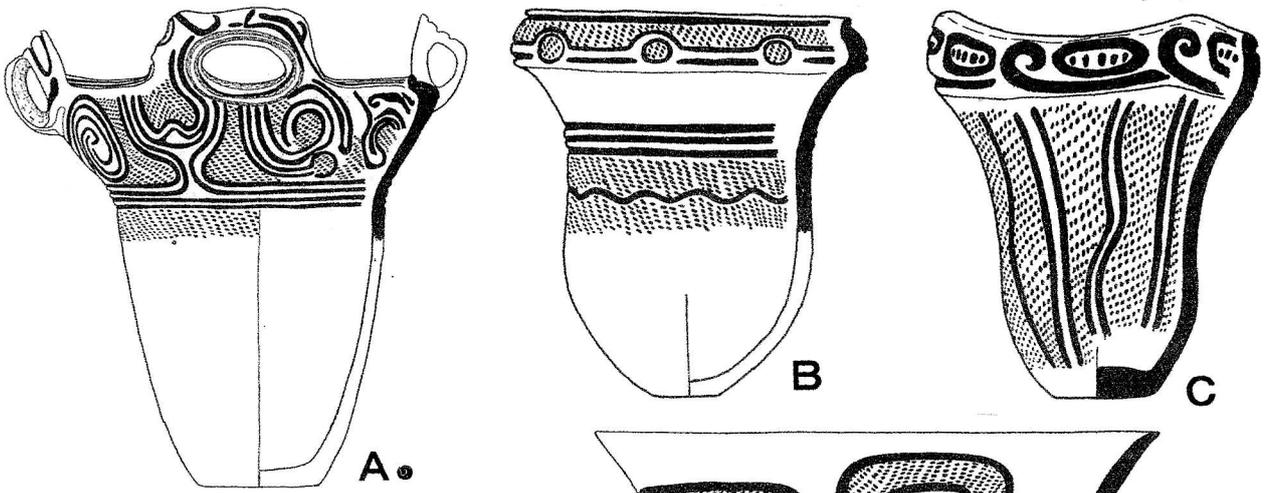
(参考) 時間の認識は社会や分野で様々、あるいはまったく異なる。

#### 1. 時間の民族誌世界

- ・エヴァンス-プリチャード 1978 (原著 1940) 『ヌア族』岩波書店 (新版 2023 平凡社ライブラリー)

#### 2. 現代物理学・宇宙論の「時間」(私は目まいの連続でしかありません！)。

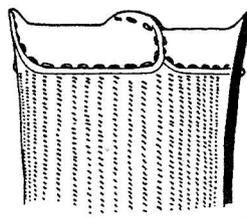
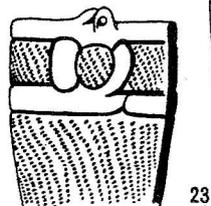
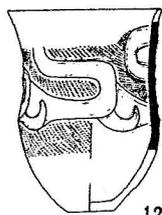
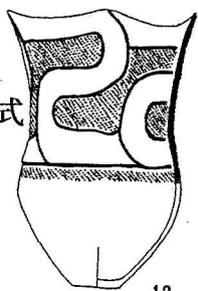
- ・野村泰紀 2022 『なぜ宇宙は存在するのか』講談社ブルーバックス B2199
- ・吉田伸夫 2024 『「時間」はなぜ存在するのか』S B新書 656
- ・橋元淳一郎 2024 『光速・時空・生命一秒速 30万キロから見た世界一』インターナショナル新書 147



本宮市上原 (かんばら) 遺跡出土土器の型式を判別してみよう  
 上のA~Eは【2】に図があるもの、下F~Jはないもの  
 (目黒吉明・丹羽茂 1970『本宮町上原遺跡概報』本宮町教育委員会)

福 島 県 仙 台 湾

大木 10 c 式



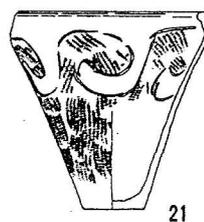
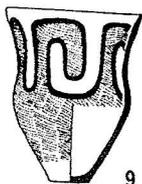
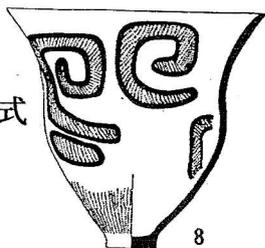
大木 10 c 式

大木 10 b 式



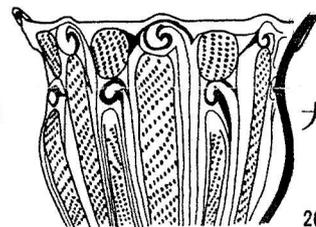
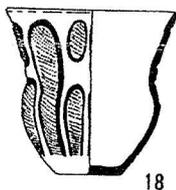
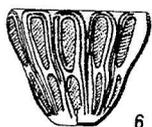
大木 10 b 式

大木 10 a 式



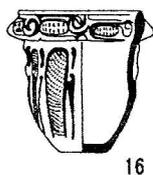
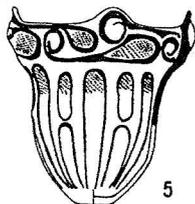
大木 10 a 式

大木 9 b 式



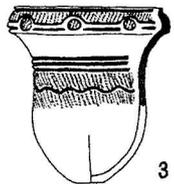
大木 9 b 式

大木 9 a 式



大木 9 a 式

大木 8 b 式



大木 8 b 式

大木 8 a 式



大木 8 a 式

\*石川注： 大木（だいぎ）諸型式とは、宮城県七ヶ浜町大木冨貝塚出土土器を基準に設けられた土器型式群。

図IV-1 中期縄文時代中・後葉東北地方南部における深鉢形土器の基本的変化（模式図）縮尺不同。

1・3・4・8・10…安達郡上原遺跡〔目黒・丹羽他（1970）〕、2…福島市矢細工遺跡、5～7・11～13…二本松市上原遺跡、9…郡山市久保田沢遺跡、14…宮城県大木冨貝塚〔林謙作（1965）〕、15…宮城県大松沢貝塚〔加藤孝（1956）〕、16・18・19・22…宮城県南境貝塚〔林謙作（1965）、後藤勝彦（1968）〕、17・20・23・24…宮城県梨木冨貝塚〔芳賀良光（1968）〕、21…宮城県長根貝塚〔伊東信雄（1969）〕、25…宮城県西ノ浜貝塚〔後藤勝彦（1967）〕

福島・宮城両地域の縄文中期中～後葉の土器型式編年

（丹羽茂 1971「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『福島大学考古学研究会研究紀要』第1冊）

縄文土器型式の大別

	渡島	陸奥	陸前	關東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	榎木 1 ◇ 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根? ×  (+)	ひじ山  粕畑		黒島 ×	戰場ヶ谷 ×
前期	石川野 × (+)	圓筒土器 下層式 (4型式以上)	室濱 大木 1 ◇ 2 a,b ◇ 3-5 ◇ 6	蓮田 { 花積下 關山 黒濱 諸磯 a,b 十三切臺	(+) (+) (+) 跡場	銚ノ木 ×	國府北白川 1 大歳山	磯ノ森 里木 1	森?
中期	(+) (+)	圓筒上 a ◇ b (+) (+)	大木 7a ◇ 7b ◇ 8 a,b ◇ 9, 10	御領臺 阿玉臺・勝坂 加曾利 E ◇ (新)	(+) (+) (+) (+)			里木 2	曾畑 阿高 出水 } ?
後期	青柳町 × (+) (+)	(+) (+) (+)	(+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B " 安行 1, 2	(+) (+) (+) (+)	西尾 ×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西平
晚期	(+)	龜ヶ岡式 (+) (+) (+) (+)	大洞 B " B-C " CI, 2 " A, A'	安行 2-3 " 3	(+) (+) (+) 佐野 ×	吉胡 × " ×  保美 ×	宮瀧 × 日下 × 竹ノ内 ×  宮瀧 ×	津雲下層	御領

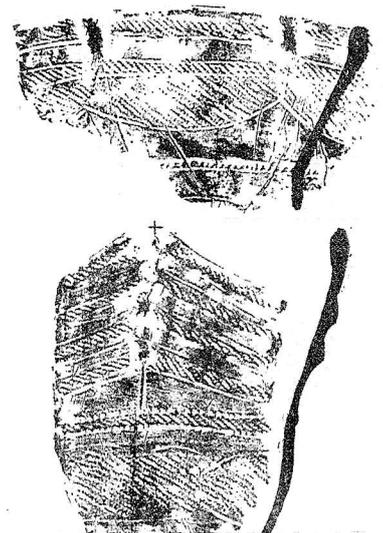
- 註記 1. この表は假製のものであつて、後日訂正増補する筈です。  
 2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。  
 3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と關聯する土器を出した遺跡名。

日本最初の縄文土器型式の編年の枠組み (山内清男 1937 「縄文土器型式の細別と大別」)

各地域に土器型式の序列をつくり、全国の対比を行い、土器型式数が多いので便宜的に五大別した。

文化の變遷は進行中の状態で觀察することは出来ない。任意の物件を並列し、獨斷によつて古かるべきものを決め、それに照して新しきものを推定する様な所謂型式學は取るに足らず、我々もこの方針の失敗を數多傍觀したのである。眞に執るべき科學的手段は先づ個々の短い時代の文物を確認する。そしてこれらを層位又はその他の自然現象に應じて年代順を定める。又はその欠を補ふため文物の比較をして先後を推定する。そして各々の短時期の文物を年代的に編成し、その間に於ける文物の變遷を見るのが順序である。従つて連續する文化の區分は最も短時日である程、一舉一動まで明にされるであらう。縄文土器文化の最短期間の状態は縄文土器の型式區分を通じて知り得るのであるが、その區分が最も細くなる程、その變遷の詳細を明にし得るであらう。型式は益々細分され、究極まで推し進むべきである。

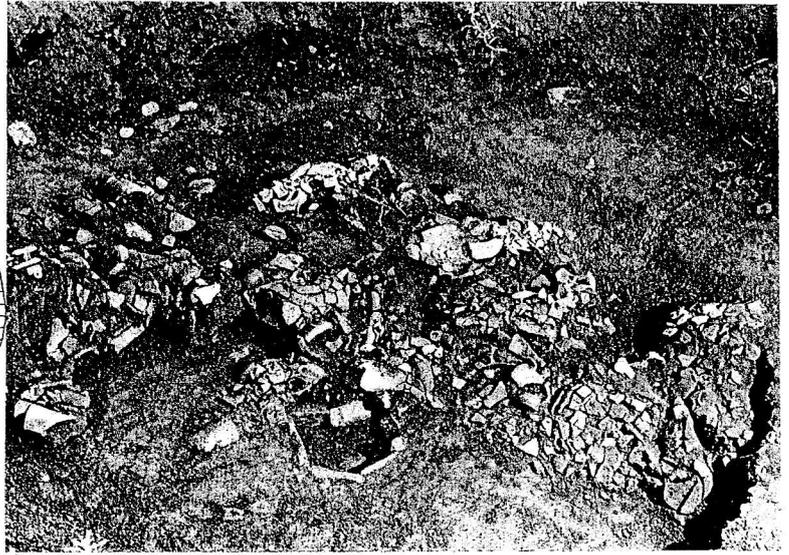
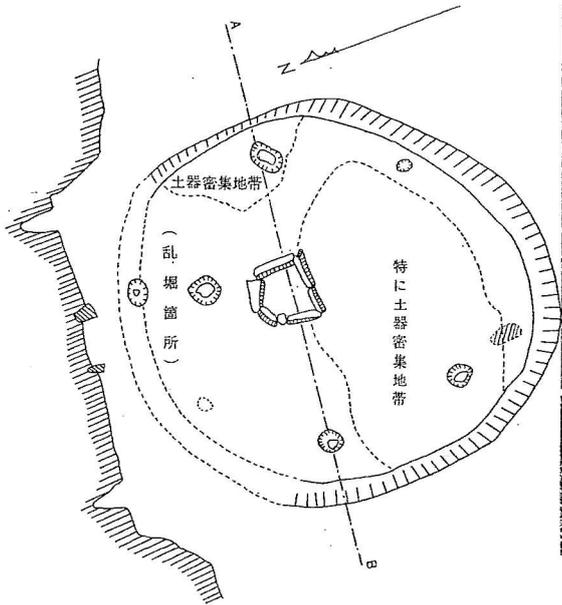
山内清男 1937 の縄文土器型式編年の方法



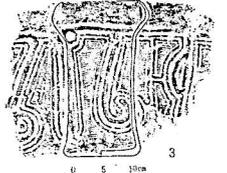
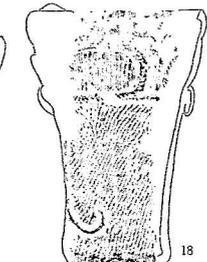
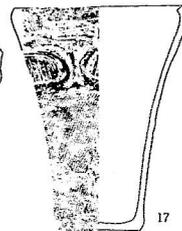
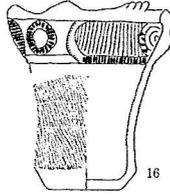
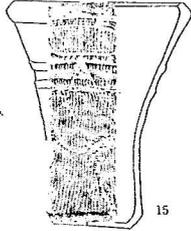
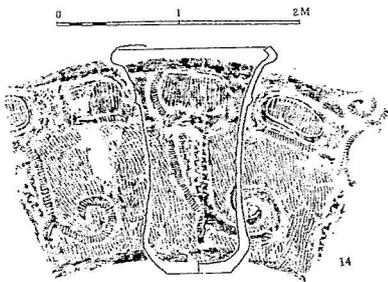
安行 1 式土器: 千葉県岩井貝塚 (『先史考古学』 1-1, 1937)



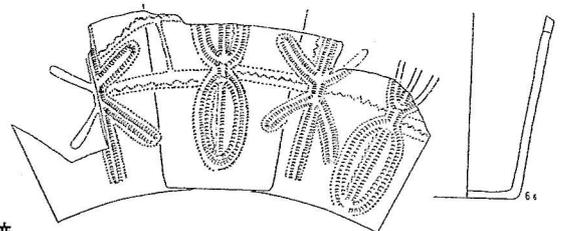
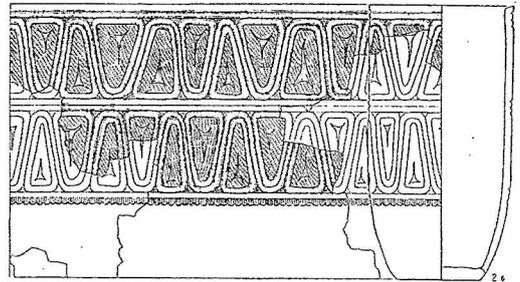
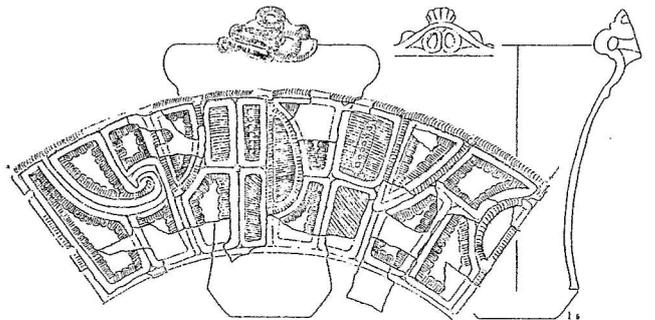
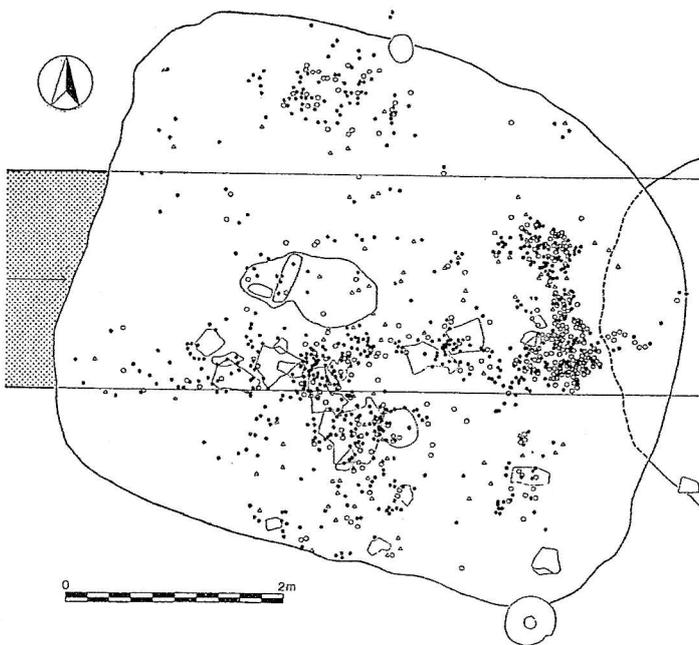
山内清男 (1902. 1. 2-1970. 8. 29)  
(中村五郎 1996 『画竜点睛』)



竪穴住居址の全貌 (最初に清掃したところ)



山梨県重郎原遺跡



国分寺市貫井南遺跡

一括遺物でも出土状態などに注意

上：住居跡の床面に張り付いて出土した土器群で、全形が復元できる

下：住居跡の埋土上から破片となって出土し、復元しても抜けが多い

(『重郎原遺跡』1972, 山梨県教育委員会・『貫井南遺跡』1974, 同遺跡調査会)

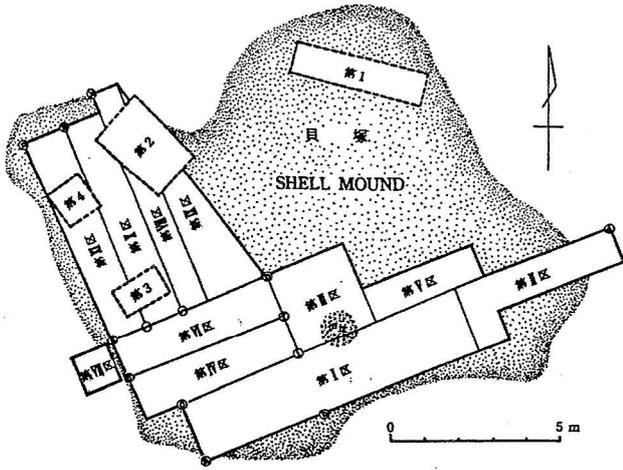


FIG. 1 夏島貝塚発掘地区区分図

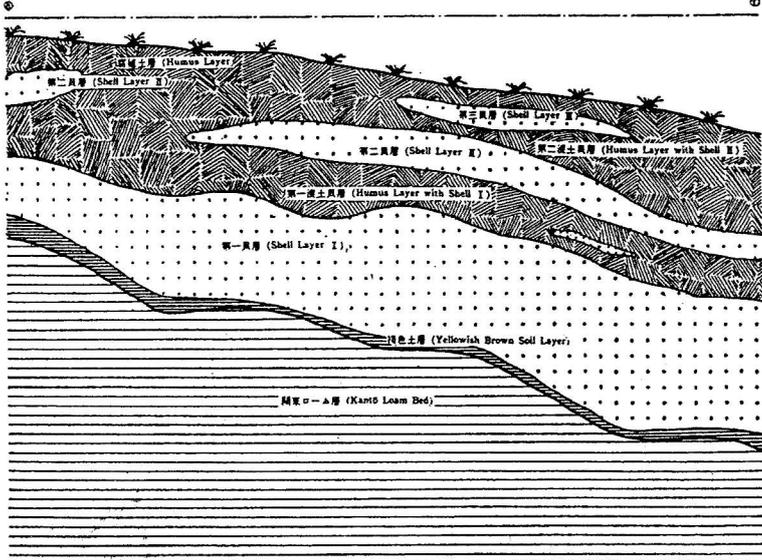
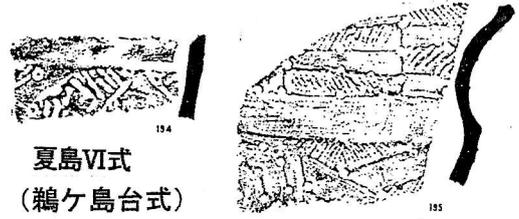


FIG. 4 夏島貝塚 e-f 断面図

第1表 第Ⅷ区における土器型式と層位との関係

土器型式 層位	夏島Ⅰ式	夏島Ⅱ式	夏島Ⅲ式	夏島Ⅳ式	夏島Ⅴ式	夏島Ⅵ式	夏島Ⅶ式	型式不詳	計
腐植土層		10	9	4		35		74	132
第三貝層									0
第二混土貝層									0
第二貝層		3		24		15		28	70
第一混土貝層		27	15					91	133
第一貝層		322						132	454
褐色土層	8							19	27
不明層		55	4	7		12		42	120
計	8	417	28	35	0	62	0	386	936



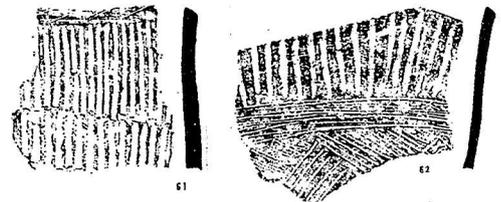
夏島Ⅵ式  
(鶴ヶ島台式)



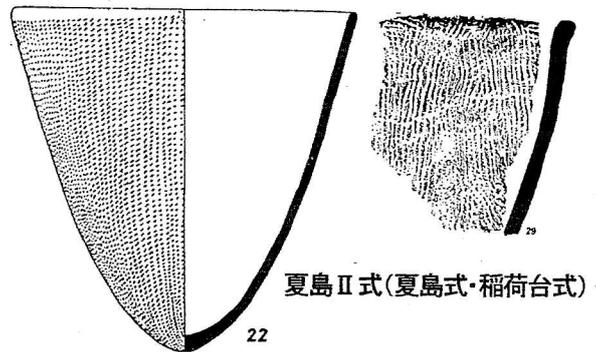
夏島Ⅴ式(野島式)



夏島Ⅳ式(田戸上層式)



夏島Ⅲ式(田戸下層式)



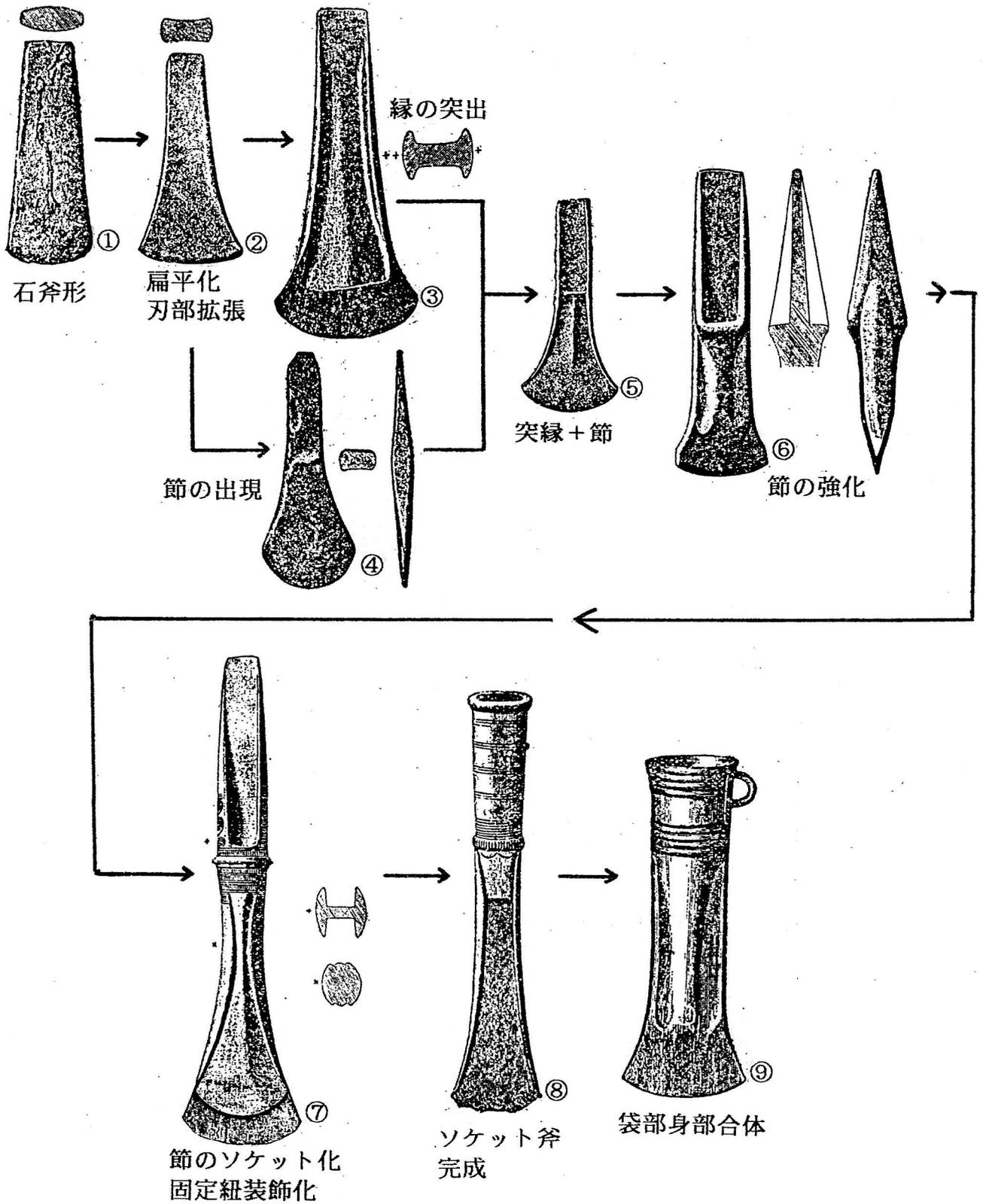
夏島Ⅱ式(夏島式・稻荷台式)



夏島Ⅰ式(井草式・大丸式)

横須賀市夏島貝塚の層位と土器型式

(杉原荘介・芹沢長介 1957『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』明治大学より作成)

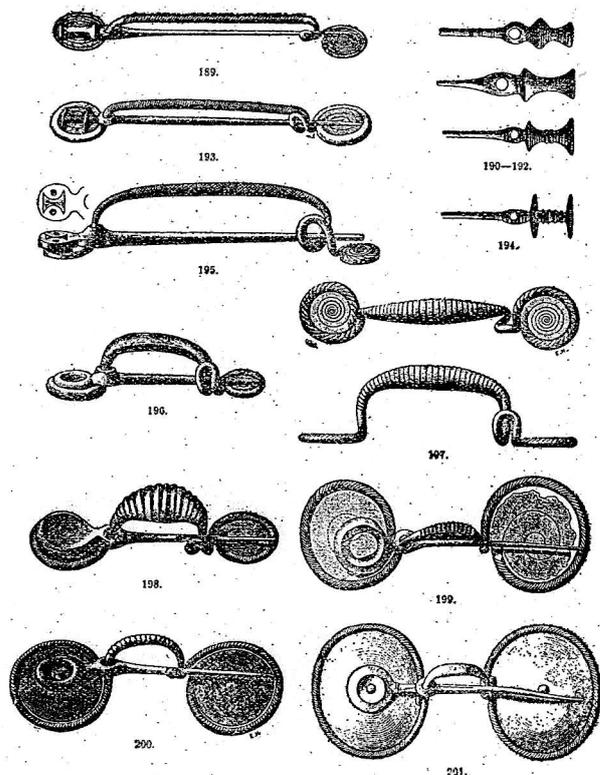


北欧青銅斧の型式変化

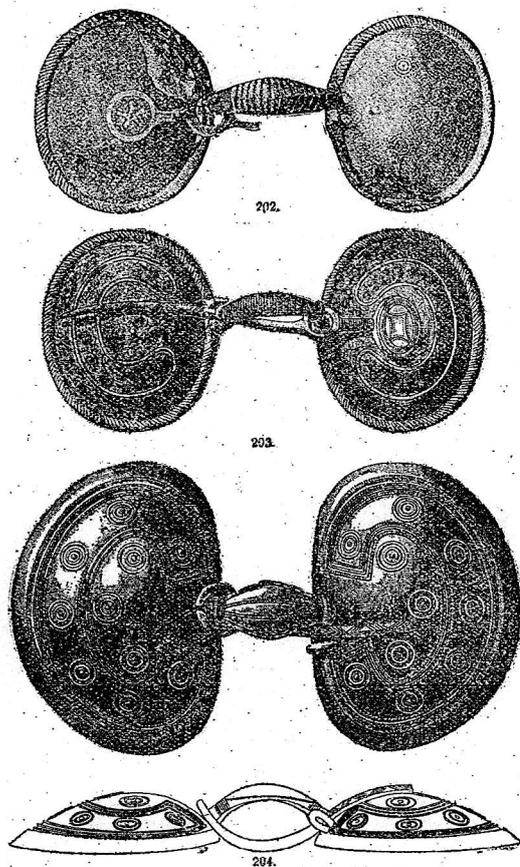
0. モンテリウスの型式学： 型式組列を仮設する（銅斧）



Oscar Montelius: スウェーデン: 1843-1921



Montelius Typologie und Chronologie			
Beile	Schwerter	Fibeln	Gürteldosen



北欧・留め針の分類・型式組列 (『型式学研究法』より)

モンテリウスによる北欧青銅器の型式学と編年(P.Åström ed. 1995 *Oscar Montelius 150 years*)

留め針・剣・鍋の型式組列も仮設し、一括遺物で検証して編年を構築する

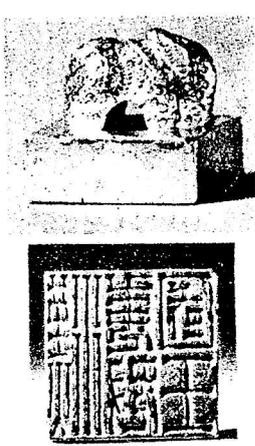
事實北九州の彌生式甕棺から発見される鏡の型式は、前漢代の精白鏡の類がもつとも多く、漢中期の方格規矩四神鏡がこれにつき、漢代以後に降る遺品を含んでいないが、これはまた平壤附近の樂浪郡時代の古墳から発見される鏡の型式が、古式の精白鏡にはじまつて、漢中期の内行花文鏡・方格規矩四神鏡をもつて大半を占めている事實と相表裏するものといわねばならない。福岡縣糸島郡小富士村御床松原遺蹟や、京都府熊野郡湊村函石濱遺蹟や、大阪府中河内郡瓜破村大和川底遺蹟で、彌生式土器の包含層から採集せられた王莽の貨泉（第三十六圖イ）や、福岡縣の須玖や三雲で甕棺から発見された璧の如きも、また同じ徑路を通つてわが國に入つたものであろう。あるいは福岡縣糟屋郡志賀島村志賀島叶崎から発見された、「漢委奴國王」の五字を刻した金印（？）も、おそらく樂浪郡を仲介とした日華通交の結果であらう。

(中略)

ところが彌生式時代の中期になると、甕棺出土の漢鏡を通じて認められる樂浪郡との關係によつて、その上限が紀元前一世紀の初頭より遠く遡りえぬものであり、また王莽の貨泉の如き一世紀の初めの短い期間に作られた遺品の伴出などによつて、下限は紀元後一世紀の前半以後に求むべきことが考えられるのである。換言すれば彌生式時代の實年代は、西曆紀元前後の一、二世紀にわたる中期の年代の決定によつて、その前後にほぼ同様な期間を加算することにより、紀元前一、三世紀より紀元後二、三世紀にわたる存続を考えるほかはないのである。彌生式時代の後期にもまた、據るべき年代決定の資料がないので、その終末の時期はつぎの古墳時代の研究によつて推論せらるべきであらう。

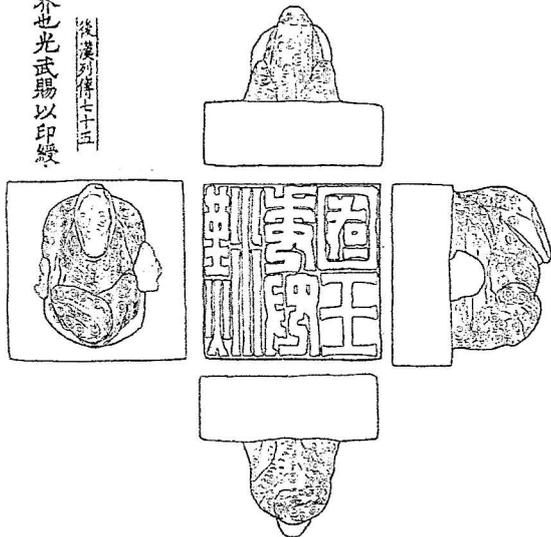


第三十六圖 貨泉と金印



建武中元二年倭奴國奉貢朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光武賜以印綬

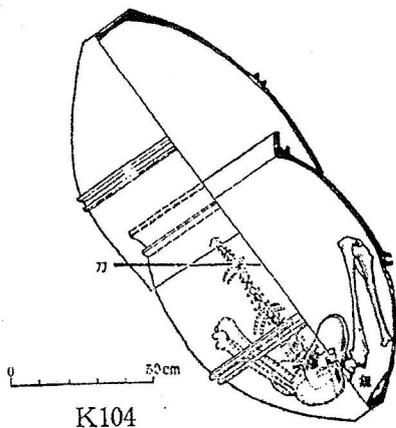
後漢列傳七十五



「漢委奴國王」金印（大塚紀宜 2008）実大

小林行雄 1951 『日本考古学概説』では金印を弥生中期とみていた

佐賀県三津永田遺跡の 1953 年調査で  
後期甕棺から後漢初頭の獸帯鏡出土！



K104



素環頭鉄刀

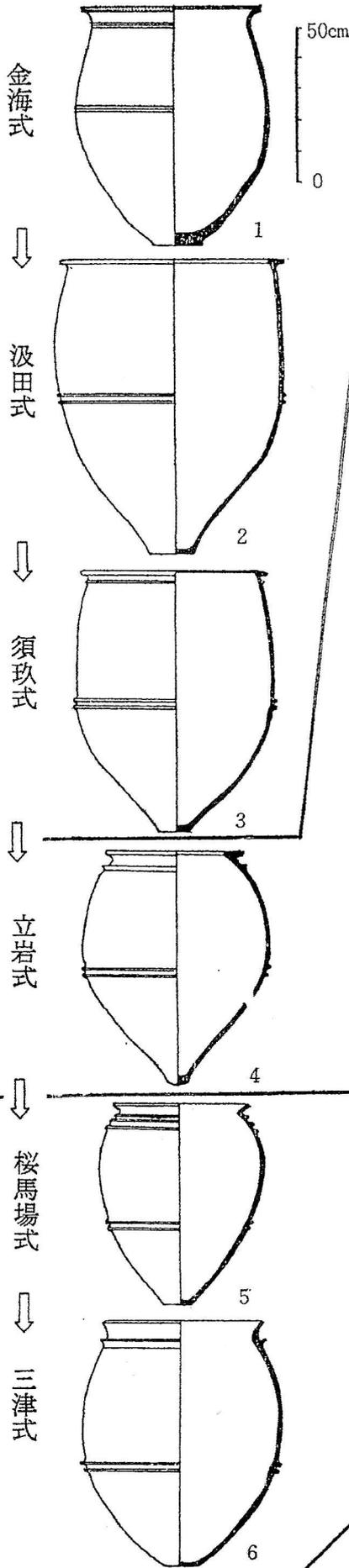


銘  
「秦言之紀造鏡如蒼竜在左白虎在右宜善賈孫子」  
獸帯鏡

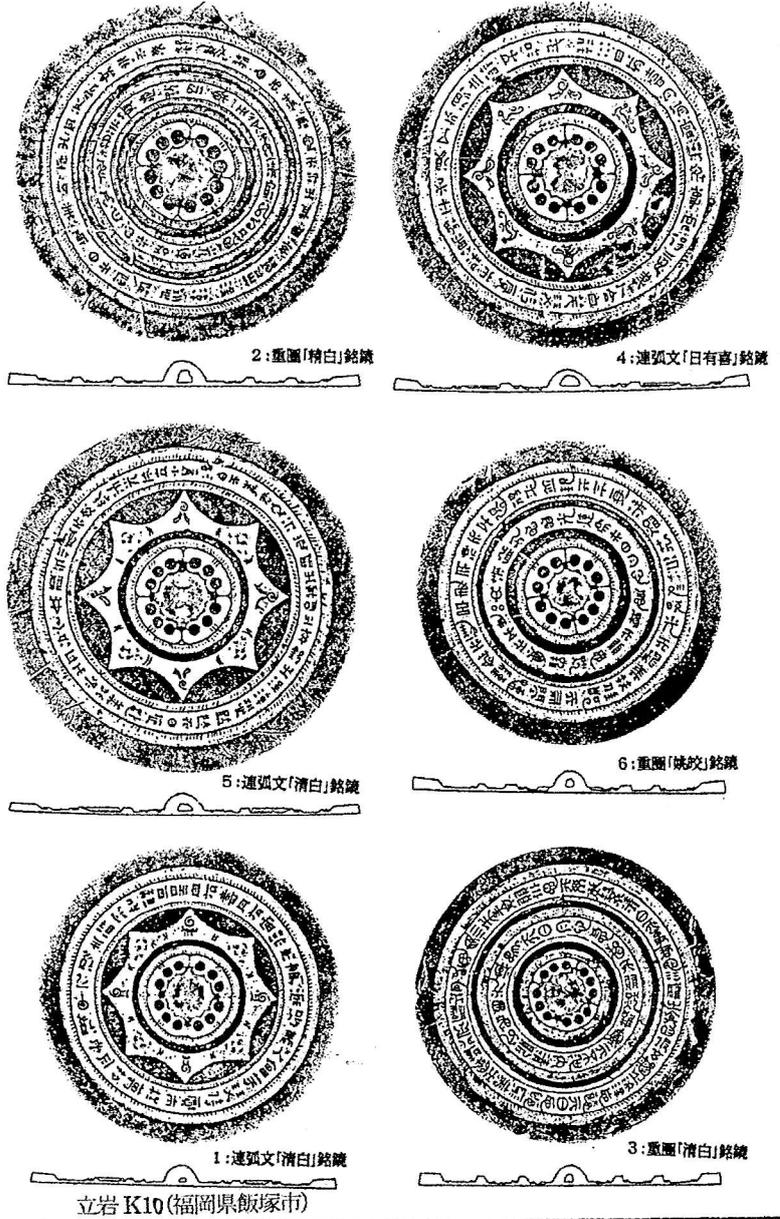
獸帯鏡

『日本農耕文化の生成』本文編, 1961)

1960 年代まで、金印（AD57 年）は単独出土、新～後漢初期の銅鏡が出土した甕棺の型式は未定のため、北部九州の彌生時代の年代が決まらなかった

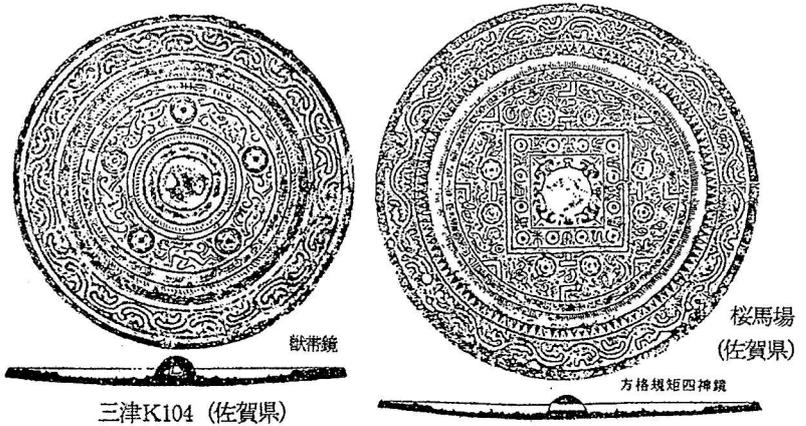


前漢後期の銅鏡



立岩 K10 (福岡県飯塚市)

新〜後漢初めの銅鏡



三津 K104 (佐賀県)

桜馬場 (佐賀県)

方格規矩四神鏡

森貞次郎 1968 による甕棺編年と中国鏡の共伴関係  
 (甕棺図面のみ森 1968 「弥生時代における細形銅剣の流入について」  
 『日本民族と南方文化』平凡社)

甕棺型式の編年が定まり、中期末に前漢鏡 (BC 1 世紀)、後期前半に新〜後漢初 (AD 1 世紀) の銅鏡が伴うと確認されて、北部九州の年代が明確に。

期	型式	段階	蓋坏	高坏	甗	樽形甗	其他 (甗・提瓶・平瓶・皿・壺・器台・甕・其他)
I 期	TK73型式	TK73号窯					
	型式	TK216					
	TK208号窯	ON46号窯					
		TK208号窯					
II 期	型式	TK23					
	型式	TK47					
	TK10型式	M15					
		TK10号窯					
	TK10型式	M10号窯					
		TK43					
III 期	型式	TK217					
	TK46	TK46					
		MT-21					
	型式	TK48					
IV 期	型式	TK7					
	MT83型式						

**須恵器年表**

期	西暦	型式 (陶邑窯)	(陶邑窯)	地方窯	古墳・宮都他
I	A.D. 400	TK-73 TK-216 TK-208 TK-23 TK-47	(ON-46) (MT-84) (KM-1)	○大阪・一須賀2号窯	○大阪・履中陵古墳 ○大阪・応神陵古墳
	500			○宮城・大蓮寺窯 ○愛知・東山218号窯 ○島根・迫谷2号窯 ○島根・高畑窯 ○長野・松ノ山窯	○大阪・仁徳陵古墳 ○島根・金崎古墳 ○埼玉・稻荷山古墳
II	600	MT-15 TK-10 TK-43 TK-209	(MT-85)	○京都・幡枝窯	○福岡・岩戸山古墳 ○奈良・飛鳥寺
		TK-217 TK-46 TK-48 MT-21	(TK-80)	○兵庫・庄慶山1号窯	○滋賀・近江京 ○奈良・藤原京 ○奈良・平城京
III	700	TK-7 MT-83	(KM-16) (TK-53)	○国分寺・尼寺の造営 ○地方官衙の整備	
			800		○京都・長岡京 ○京都・平安京

辛亥年七月廿二日記乎德居臣上祖名慈高此地其兒多加利足尼其兒名己加利德居其兒名多加拔次德居其兒名多沙鬼德居其兒名半呂比  
其兒名加差拔奈其兒名平德居臣世々為杖刀入首奉事來至今機加多文齒大王寺在斯鬼宮時吾左臣天下令作此百練利刀記吾奉事根原也  
辛亥年七月廿二日記乎德居臣上祖名慈高此地其兒多加利足尼其兒名己加利德居其兒名多加拔次德居其兒名多沙鬼德居其兒名半呂比  
其兒名加差拔奈其兒名平德居臣世々為杖刀入首奉事來至今機加多文齒大王寺在斯鬼宮時吾左臣天下令作此百練利刀記吾奉事根原也

辛亥年銘鉄劍  
AD471年  
埼玉県行田市稻荷山古墳

\* 陶邑地区区分の略号 TK=高藏 MT=陶器山 ON=大野池 KM=光明池

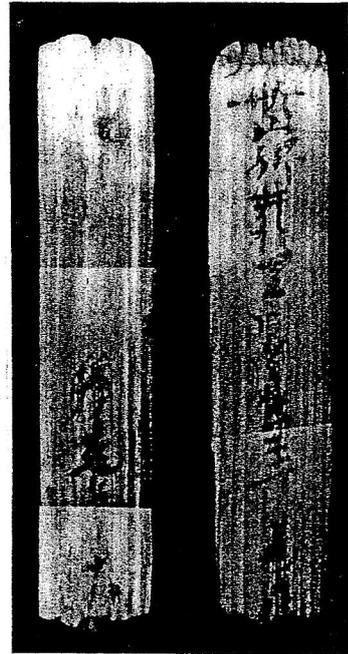
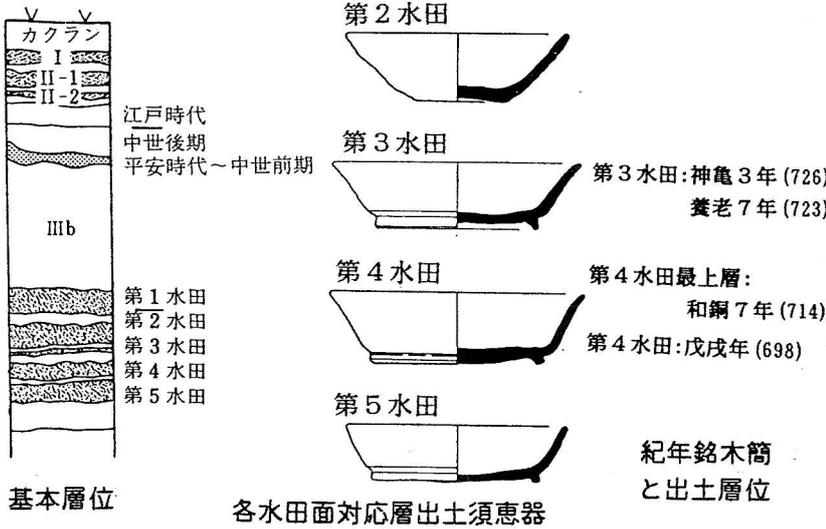
**須恵器：陶邑窯の田辺昭三編年**

田辺昭三氏が『須恵器大成』に示された須恵器年表

(田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店)の98~111頁の実測図に、(田辺昭三 1966『陶邑古窯址群I』平安学園研究編集第10号)の図版43のTK7号窯の資料を追加して作成した。なお、一部掲載出来なかった資料がある。また、TK73型式古段階の資料は割愛している。

**辛亥年 (AD471) 銘鉄劍が須恵器編年に年代数値を与える**

(近つ飛鳥博『年代のものさし』+田辺『須恵器大成』+『埼玉稲荷山古墳』)



紀年銘木筒

九〇

長野県屋代遺跡群の層位・須恵器の型式変化・紀年木筒  
(『屋代遺跡群出土木筒』1996, 長野県埋文センター)

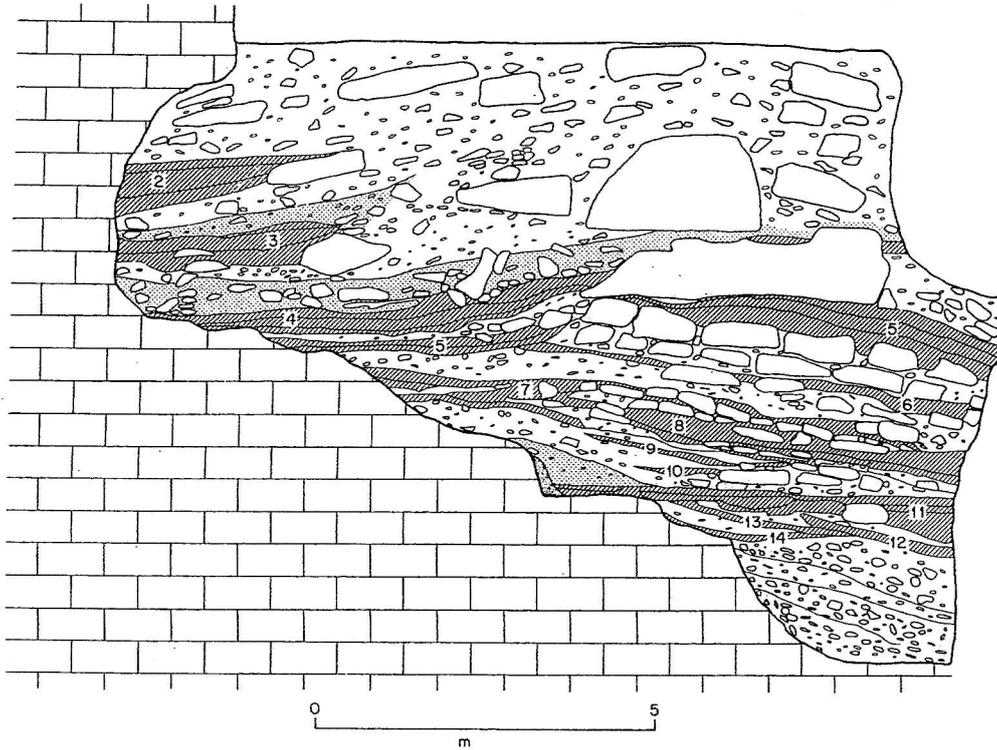


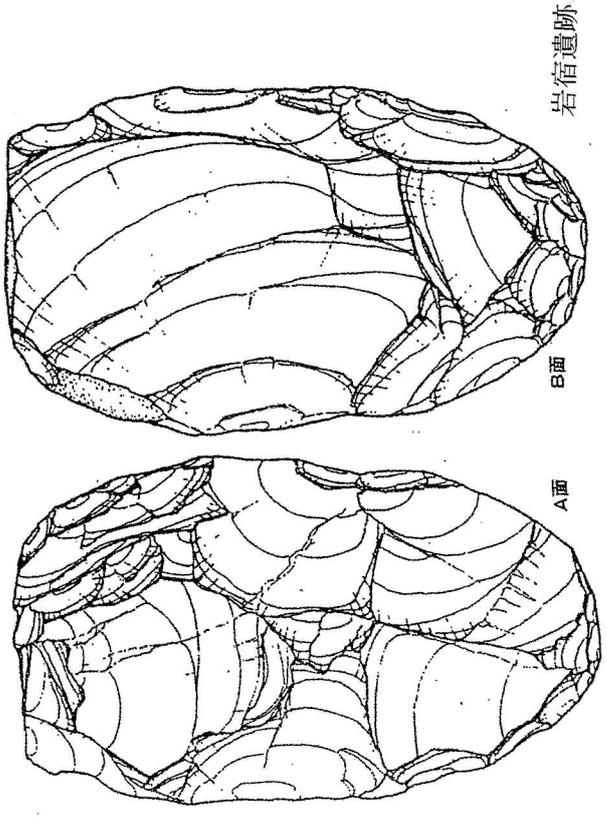
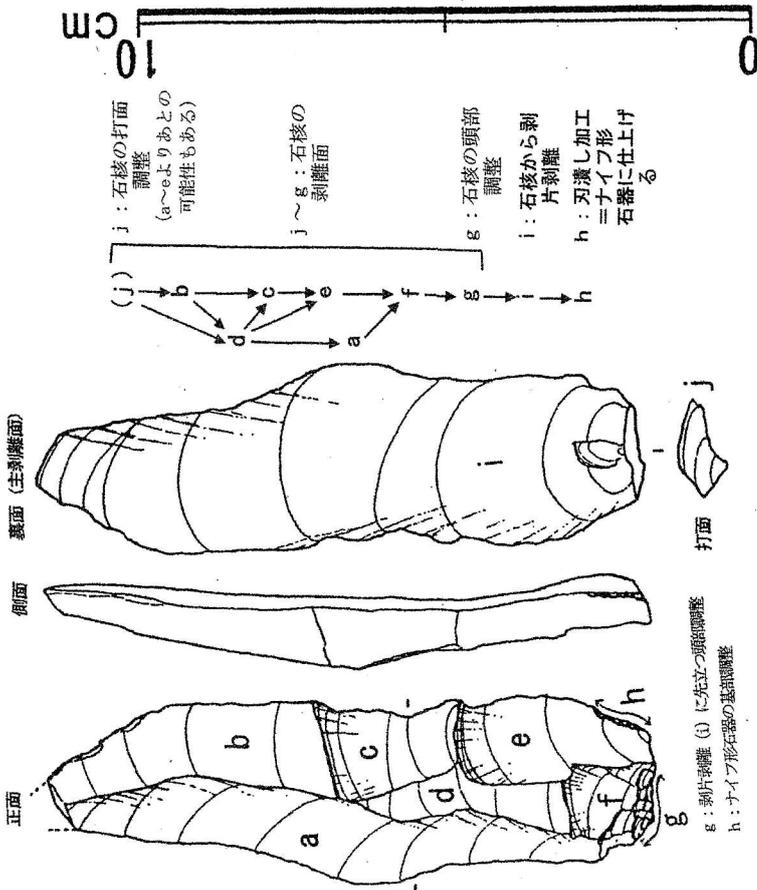
Fig. 2.24 A section through the deposits at the Abri Pataud. The numbers refer to the stratigraphical levels that were recognized by the excavators and which contain artifacts and hearths (after Movius, 1977). The sequence is as follows:

level 2	Proto-magdalenian	21 940 BP ± 250
3	Perigordian VI	23 010 BP ± 170
4	Perigordian Vc	27 060 BP ± 370
5	Perigordian IV	front c. 29 000 BP
		rear 27 900 BP ± 260
6	Evolved aurignacian	c. 32 000 BP
7	Intermediate aurignacian	32 8000 BP ± 500
8, 9, 10	Intermediate aurignacian	no date
11	Early aurignacian	32 600 BP ± 800
12	Basal aurignacian	33 260 BP ± 500
13	Basal aurignacian	no date
14	Basal aurignacian	34 000 BP ± 675

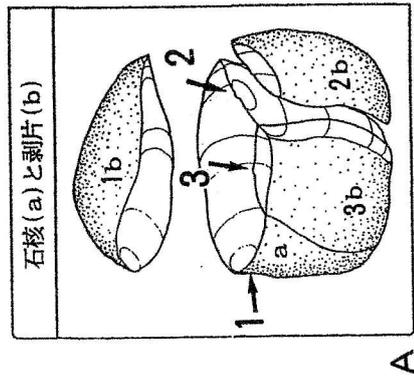
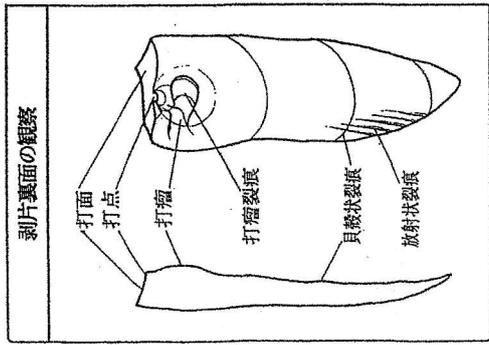
<層位と編年>

フランス: アブリ・パター洞窟の層位と放射性炭素年代測定値  
(T.Champion et.al 1984 *Prehistoric Europe*)

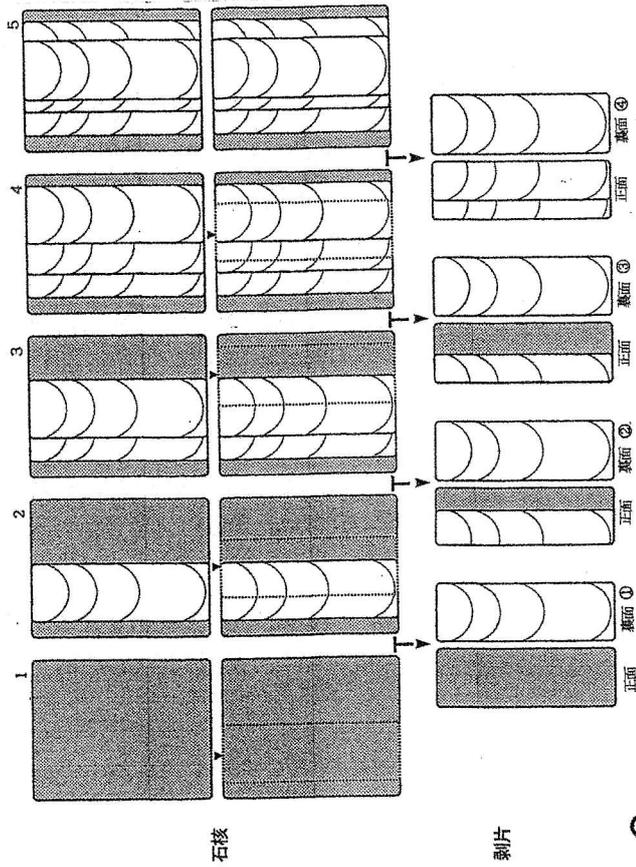




岩宿遺跡



石核と剥片 (左), 剥片に現れた剥離痕跡 (右) (安藤政雄講義資料)



C 石核から順次、剥片を剥ぎ落とすようになるか (安藤政雄講義資料)

短時間で進む石器製作. そこから旧石器時代人の行動を復原.

(左: 安藤政雄氏講義資料, 右: 須藤隆作図 / 『明治大学考古学博物館展示図録』 1987)